

～臨床留学体験記～

**What is your dream?
We support your dream.**

米国ペンシルバニア大学 Vascular and Interventional Radiology 科への留学
～放射線科医一年目での挑戦～

関西医科大学附属枚方病院 血管造影・IVR科 専修医 八木理絵

ペンシルバニアは、アメリカ誕生の地として有名ですが、同時に Interventional Radiology(IR) の発祥の地の一つでもあります。ペンシルバニア大学 IR科 名誉教授 Stanley Baum 先生が、1968 年に消化管出血に対する血管内治療を先駆けて記した Abram's Angiography の著者であることは言うまでもありません。

ペンシルバニア大学への留学、思い立ったら吉日。私が渡米したのは、放射線科入局後初めての春、つまり初期臨床研修終了直後のことでした。ペンシルバニア大学校舎内でも日本から寄与された桜が満開の時期を迎えていました。



入局直後の臨床留学は、放射線科学講座、ましては当大学でも前例がありませんでした。当然、新しいことを開拓し、さまざまな障害や困難を乗り越えるのは容易では

ありません。しかしながら、夢を現実のものにするためには、多くのご尽力の下、何の躊躇もなく邁進するのみでした。澤田 敏 教授を始め、当講座の先生方、家族や友人への感謝の念は筆舌に尽くしがたいものがあります。またそのような環境にいることのできる自分はとても恵まれていると実感致しました。

本稿では、お伝えしたいメッセージが、三つあります。
まず第一は、‘Nothing is impossible!’
これは私の恩師の言葉で、私の座右の銘です。
本留学でもさまざまな場面で実感しました。

私は、ともすれば時期早尚だったかもしれませんが、猪突猛進、渡米しました。
そこにはさまざまな貴重な出会いがあり、またたくさんの教訓を得ることが出来ました。

‘You need to be mentored by wise teachers.’
二つ目がこの言葉で、とても印象深く脳裏に焼きついています。
ペンシルバニア大学 IR 科では早朝から resident や fellow を対象に講義があります。
やはり、一番圧倒されたのは、医学教育のあり方です。講義の先生方は皆、正に歩くバイブルであり、mentor なのです。

「Venous Interventional Radiology with Clinical Perspectives」著者 IR 科教授 Scott O. Trerotola 先生を始め、「Interventional Radiology in Women’s Health」著者 Shlansky-Goldberg, Richard 先生、また「Radiology Secret」著者の Jeffrey A. Solomon 先生などに直接教えを請うことが可能なのです。これ以上の恵まれた環境はないのではないかと思います。そして、ペンシルバニア大学 IR 科にはまさしく「Baum」という名の会議室があり、そこで早朝から講義が行われます。教育学的講義や症例検討など、アメリカンサイズのコーヒーを片手に、時にはドーナツを片手に私も毎朝参加させて頂きました。その後、IR での実際の施手技や研究室・動物実験室での実践的 IR 手技などの、臨床研修を行ないました。

しかし放射線科医一年目、駆け出しの新参者にとって、慣れない環境での孤独な留学生活は一筋縄には行きません。

そんな留学中に、Creighton 大学放射線科臨床教授兼任、済生会泉尾病院放射線科左野 明先生に同行させていただき、Creighton 大学へも訪問する好機を得ました。日本から来られた左野明先生が、救世主のように思えたのを今でも鮮明に覚えています。Creighton 大学では、「骨粗鬆性椎体圧迫骨折に対する経皮的椎体形成術」についてミニレクチャーまで担当させていただくという大役を仰せ付き感謝しています。



私は今、留学を通して得たことを糧に、現在、血管造影・IVR科専修医として、日々夢に向かって邁進しています。そして、この上なく **Enjoy** しています。
最後に、何よりのメッセージは **Enjoy!**です。

これまで厚い恩恵を受けてきたからこそ、その大切さが身にしみてわかります。そしてサポートを次の世代へ還元するサイクルが、夢を叶える原動力になることも実感しています。これから放射線科医師を目指す方、夢への情熱にあふれている方、留学を考えているが一步を踏み出せないでいる方、一人でも多くの方々に、この体験記がIR、ひいては留学のすばらしさを伝える一助になれば大変幸甚に存じます。

末筆ながら、本留学時のみならず、いつもご助力賜っております皆様に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。